

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

53

優子が風呂から上がると、夫の義弘が寝室で待ちかまえていた。

「優子、風呂、長かったね……。」

「ん? ごめん、千春たちは?」

「もう寝たよ。」

「ああ、ごめん、ありがとう。」

義弘となかなか目を合わせようとしないう優子に対して、

「ねえ、どうした? 顔が真っ赤だぞ?」

そう言うと、義弘が優子の体をベッドに押し倒してきた。

「や、やだ、やめてよ。千春たちが起きてくるわ。」

「大丈夫だよ。」

「あれ? 優子ちゃん、どうしてこんなになってるの?」

パジャマの裾から手を入れて、優子の固くなった乳首を弄ぶ。

「それに、ひよつとして……。」

「ほら、ここも!」

さらに、優子の下着の中に手を入れてきた。

「どうして、こんなに濡れてるの?」

「あ! いや……」思わず逃れようと腰を引く優子に、

なおも執拗に義弘が指を入れてくる。

「ねえ、優子? どうしてこんなに感じちゃってんの?」

もう、めちやくちや熱くなってるよ、ここ。」

そう言うと、義弘はいきなり優子のズボンと下着を剥ぎ取り、優子の秘部に顔をうずめてきた。

「あ……、義弘さん、ダメよ。」

「どうして? 優子ちゃんがこんなに感じてるのに、俺、ほっとけないよ。」

(続く)